

会報

道南

平成13年
新年号

創立四十周年を祝う

会長 室谷 邦雄

新年お目度うございます。

今年、道南会が昭和三十五年七月に発足して四十周年を迎えます。この間いろいろな方々が道南会のお世話をして下さり、毎年楽しい会合を続けて今日に至っております。

私の記憶に残っている発足当時の方では、阿部良平、渡邊紳一郎、前田梅松、武富安雄、亀井勝一郎、和田貞一、梁川剛一、従二建二、東出三郎などの方々がおられました。渡邊忠雄さん（元三和銀行頭取・百歳）山下静一さん（道南会名誉会長・九十二歳）は創立立時からの会員で、今も健在です。

初代会長の渡邊紳一郎さんが会の発足の時の挨拶で「故郷で共に遊んだ友達、共に苦労した勉強時代、そして今迄続いている友情などの思いがつのって道南会の発足となったもので、面倒なことは一切やらない、昔の楽しかった思い出を語り合う機会を作ったのが会の目的である」

とっております。

二代目会長の和田貞一さん、三代目会長の山下静一さんの後を受けて、私は平成九年九月一日の総会で四代目会長に選ばれて今日に至りました。この間、道南会運営の基本方針は会員の皆様のご協力とご支持によって、創立以来変わることなく脈々と続いていることは心強い限り

であります。

発足当時の会員数は三十名程度でしたが、現在は四百名を超えております。このところ会員の高齢化が進んで退会されたり、他界される方が増える一方、入会希望者も多くなり、この世代交替期に会員の増加を図ることができそうです。

会員の中には有名人も沢山おられますが、肩書きを抜きにして小中学校時代に戻って話し合える貴重な場となっております。またその様な会として息長くお付き合いしてゆきたいものと願っております。

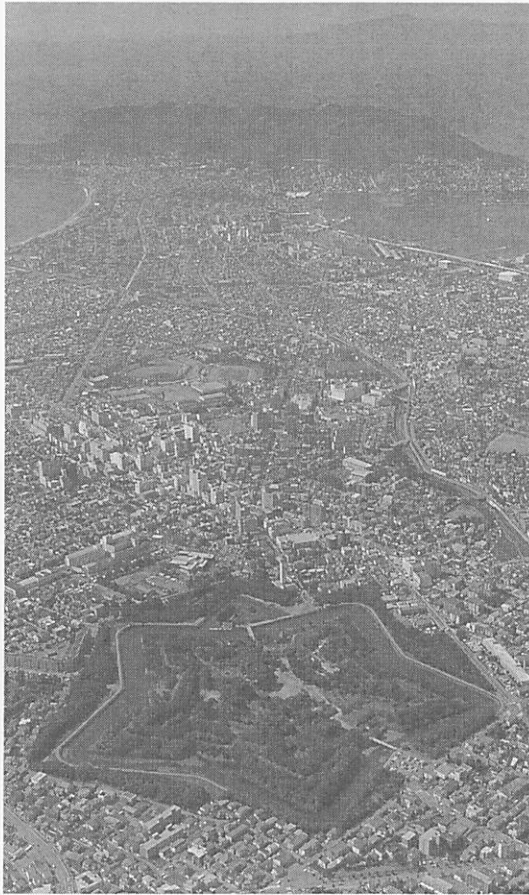
道南会の行事は年初の総会、夏期の納涼懇親会が基本ですが、数年前から殆ど毎月のように小会合（見学会・ハイキングなど）を催しています。この小会合を

機会に、会員同志が急速に親しくなっているように思います。特に高齢の会員に人気がありますが、これからは若い会員の参加を大いに期待しております。

首都圏には道南の小学校、中学、高校の同窓会が数多くあり、それぞれ会合を開いています。道南会にはそれらの同窓会の幹部が揃っておりますので、今後はこれらの同窓会の連携をとるよう積極的に取り組むたいと考えております。また道南地方出身者の松前会、上磯会、奥尻会なども活動されておりますので、道南会が取り纏め役となつて道南地方発展の後援団体となり、大きく輪を広げて行きたいものです。

このように色々の意味で、今迄以上に道南会が道南地方発展の大きな推進力となつてゆけるよう頑張る必要があると思っております。また道南会は一度出席したら、次の会が待遠しくなるような楽しい会に発展させてゆくよう、皆さんと共に努力してゆきたいと思っております。

道南会の四十周年記念行事として祝賀会の他、記念誌の発行、郷土訪問旅行、記念植樹などを企画しております。是非多数の会員が参加されますようお願いいたします。



「はこだてを語る夕べ」

十一月六日（月）夜、首都圏に住む函館や道南出身者が一堂に会して「はこだてを語る夕べ」が開かれた。

この催しは、函館市東京事務所が開設されて今年で十五年の節目を迎えたのを機会に「はこだて観光大使」「道南会」「はこだての会」や出身小中高校の同窓会の有志が呼び掛けて実現した。

呼び掛けへの反響は大きく、予想を上回る百六十四人が駆け付けたほか、函館から市長はじめ六名が加わり百七十名が顔を揃えた。



会は午後六時から、神宮前の表参道にあるダイヤモンドホールの大広間で行なわれた。まず呼び掛人を代表して、室谷道南会長から「斯くも大勢のご参加を頂き御同慶の至りで、首都圏に住む我々がエールを送り、アイディアを提供して、郷土の発展のお役に立つよう、今後とも継続して開きたいので皆様のご賛同を得たい」との挨拶から始まった。

続いて井上函館市長から「函館市東京事務所」の十五年間に寄せられた関係者のお力添えに感謝し、今後とも東京事務所を大いに活用して頂きたい。

ところで最近の函館の話題として、四月に開学した「はこだて未来大学」は市民や関係者のご援助を得て順調なスタートを切った。志望者が多く、定員二百四十名を二百五十名に増やした程で、入学者は本州から二百名、地元から五十名であった。大学の専攻学部がいくつもコンピュータ関連のため、すでにハイテク企業が卒業生獲得を目指して函館周辺へ進出の話し合いに入っている。

次に、かねてから進めていた函館病院の移設が完了し、八百五十の病床を持つ道内は勿論、国内有数の施設となった。

百四十年前、箱館医学所として発足した函館の医療の伝統を、さらに継承発展



西原、松前、室谷、弦巻、市長、伊東学長

させたい。現にごく最近この病院で、脳死患者からの臓器移植を試みるという実績も上げている。

さらにJR函館駅周辺の開発整備も本格的に進められることとなり、新しい駅舎の完成する平成十四年に向かって面目を一新することになる。

ところで十一月一日から函館市は「特別市」の指定を受け、市のイメージアップや個性ある町づくりの推進のための事務権限が国や道から委譲された。

最後にお集まりの皆様の「ご関心も深い函館の観光の現状は、有珠山噴火や景気低迷で楽観を許さない中で、台湾からの観光客が俄に増えて、すでに三千人が訪れ来年からは一万五千人の台湾からの観

光客が期待されている。

井上市長の現状報告に参会者は安心した表情で聞き入っていた。続いて「公立はこだて未来大学」の伊東学長から大学の現状と将来像について、ビデオを使った説明があった。

道南会山下静一名誉会長から「函館の由緒ある歴史を大切に守ろう」との挨拶で乾杯から懇談に入った。

市長や石井総務部長、中村商観部長の席には入れ替わり挨拶に来る人で賑わい、久しぶりに顔を合わせた参会者達の間では、卒業以来三十年などという懐かしい挨拶が交わされていた。この間アトラクションに中部高校出身の「ウーミ」の歌が入り、政治評論家の早坂茂三氏や、函館大学客員教授で、このホールの経営にもあたられている橋本保雄氏などのテーブルスピーチのあと、福引き抽選会で終盤となり、午後八時半すぎ預金保険機構理事長の松田昇氏の閉会の辞があつてお開きとなった。（田沼修二記）

「特別市」とは

人口五十万人以上の「政令都市」、三十万人以上の「中核都市」に加えて、十二年四月から地方分権一括法の施行により、人口二十万人以上の市を「特別市」に指定することとなった。これにより函館市は十二年十一月一日から「特別市」になった。これにより中央からの大幅な権限が委譲され独自の活性化が図られる。

「ふるさと」へのメッセージ

はこだて観光大使 日比野 朋子

「この間、函館へ行ってきたわ。何度

うか。

行ってもいい所ね。食べ物美味しいし、景色は素敵だし、貴女がうらやましいわ」。私のふるさとが函館であることを知って友人、知人は勿論のこと自己紹介等でも知った瞬間にでも、人々は異口同音にこのように言ってきた。私はうれしくなって思わずにんまりしてしまう。

私が全日空で客室乗務員をしていたころも、私の「ふるさと自慢」は有名で、

あるキャプテンなどは札幌便で函館の真上を飛ぶ時など（滅多にない）コクピットから「今函館の上空だよ、とてもキレイに見えるから前においで」とこっそり誘って下さったものです（昔の話です）。

あまり帰省できなかった私は、美しく輝いて見える目の下の街に住む両親のことを思い起し、ふつと涙ぐんだものでした。

ふるさとを離れて三十数年、現在の函館は時代の波に呑み込まれ大きく変貌したようです。老いて足腰が弱った巨人のように、仲々立ち上がれないように見えます。

地元函館の人々は勿論、遠く離れても、「はこだて」を愛し続ける人々もまた、その巨人が鮮やかに蘇ることを期待してどのような形で手を差し伸べれば良いか迷い悩んでいるのが現実ではないでしょ

函館は観光都市としての知名度は高いながらも、サービスの原点であるホスピタリティにおいては、低い評価がつきまとうようです。ハードはともかく、いわゆるソフトが弱いという指摘もあります。

「観光学的」に言えば、一般に「北の地方」は「南の地方」にくらべて、ソフトが弱いと言うことが世界的にも言えるそうです。

ある方がおっしゃるには、今まで日本を支えてきた一つのキーワードが「中央・男性・中高年」であったが、これからは「地方・女性・若者」であると。

この見方からすれば、函館にも新しい私たちの大学も開学されたこともあり、若者や女性の力を借りて、是非とも元気に羽撃いて欲しいと願うものです。

私個人で申すならば、函館への熱い言葉を聞きたくて、講演先の九州で、四国で山陰で、東北で、函館の観光写真の入った「はこだて観光大使」の名刺をセツと配っております。いずれ何かを生み出してくれるコトを念願しながら、どうぞ行政の方々も観光大使を上手にコキ使って下さい。ふるさとのために何かしたくてウズウズしている紳士・淑女が沢山いらっしやいますので。

日和田山ハイキング

最後に十月十日に開かれた「ふるさと大使の全国大会」の企画の一つとして、ふるさとを詠むというのがあり、私の拙い短歌が入選し、「グループ飛行船」のメンバーで「那覇市観光大使」や「いわき大使」などをされている「あんべ光俊」氏に曲を付けて頂いたものを紹介したいと存じます。

「はこだてを 心の糧に生き抜きて
今ある我を 誇りと思わん」

西武池袋線の沿線に、高麗という駅がある。凡そ千二百年の昔、朝鮮の高麗人が日本に渡って帰化し、この土地に根をおろしたと言われ、古代農業の巾着田跡が残っている。

小春日和の十一月二十六日（日）、道南会今年二度目のハイキングを行なった。暖かい日差しを全身に浴びながら、高麗駅をスタートして、日和田山、高指山、物見山と四百米足らずではあるが、三つの山に登った。

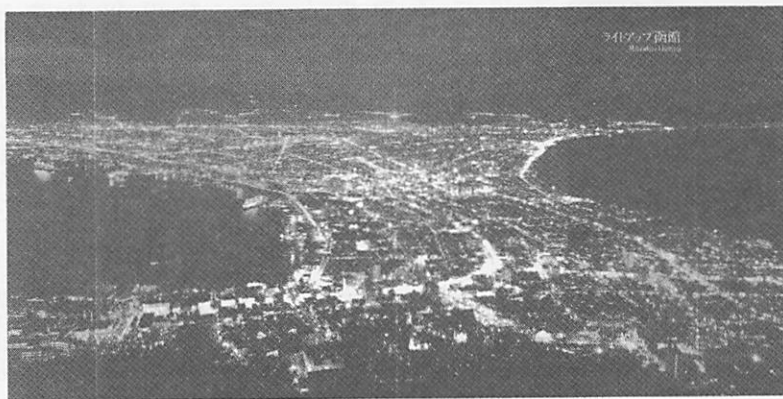
紅葉が里山へ下ってきていて、赤や黄色に鮮やかに染まった樹々の間を歩き、自然の匂いと美しさを満喫し、心地よい汗をかいた。

全員の足並みが揃っていたので、二軒の人家が佇み、春は桃源郷を思わせるユガテの集落まで足を伸ばし、東吾野駅まで六キロ、約四時間の道程を歩いた。

参加者……小森、伊藤、近江、安達、須藤、川守田、川守田（礼）の七名。

一回目は五月十三日（土）、同じ西武沿線の芦ヶ久保から日向山（六三三米）に登った。果樹園の中の坂道をゆっくり歩いて行くと、いたる所につじや山藤が咲き乱れ、眼を楽しませてくれた。

来年はもう少し回数を増やそうと思っているので、皆さんも是非一度新鮮な空気を吸いながら、汗を流して見ませんか。



函館の空

名裏方だった帆刈幸子さん

副会長 能 味 寿 哉

創立四十年を迎えた道南会の長い歴史を顧みる時、会を始めて下さった阿部良平さんと、その陰にあって草創期の会の発展に尽くされた帆刈幸子さんのことは喜寿をむかえた私の人生にとっても大きな出会いであった。阿部さんの功績は誰もがよく知っており、書かれたものも多いので、四十周年を迎えるの機会に帆刈さんについて述べてみようと思う。

帆刈さんは旧姓古井といった娘時代、函館のタイピスト学校で習得した技能で丸井百貨店脇の坂に面した会計事務所に勤めておられた。その後昭和三十四、五

年頃に上京、しばらくして落ち着いた三十七年のある日、道南会の存在を知って早速阿部さんのお宅を訪ねたというくだりは、いかにも「函館大好き人間」らしい積極的な行動力であった。道南会が出来て三年目という大事な時期であったから阿部さんも多分そうした帆刈さんの現われるのを待ち望んでいたに違いない。

それからの帆刈さんの地味ながら陰日向ない裏方の奉仕が始まった。当時は有楽町にある函館の海産商「森卯」ゆかりの「ニュートーキョー」が会場に当てられていたが、帆刈さんは昭和三十八年二月の新春懇談会に初めて出席されたようだ。一つの手記がある。「初めて出席し

た会合で幹事さん達の大変な忙しさを見て、私で出来ることがありましたら、何でもお手伝いしますからと申し出ましたら、早速福袋作りの仕事を割り当てられました。以来、姉妹のように親しくなりました。白井百合子奥さんと会場に早く出かけるようにしておりました。男性役員は会社を休んで自家用車でプレゼントの品の調達に走り回っておりました。長年会場として使った数寄屋橋ニュートーキョーは本当に思い出の種です。」と「道南会のあゆみ」創立二十五周年記念誌」に感懐を述べられている。

あの当時の幹事というか世話人で主として動かれていたのは、次の方々である。女性では故帆刈(旧姓古井)幸子、板垣(大阪谷)寿見子、故半谷文子、白井百合子。男性では故宮下広吉、松原竹造、能味寿哉、谷口治有、四宮康博、故武富紀雄、大澤素夫、福津達男、小泉龍彦の方々。既に黄泉路に向かわれた方に衷心からご冥福をお祈り申し上げる。

さて先年亡くなられた和田貞一名誉会長は、帆刈さんの誠実な人柄を深く信頼されていた。恒例の新年会や夏期懇親会が終わると、その夜か別の日に改めて皆さんのご苦労に一献差し上げたいという嬉しいお心遣いがあった。そしてその中

で帆刈さんが賑やかに語る裏方の苦心談や失敗談に、楽しそうに耳を傾けておられた。あまりお酒の飲めない帆刈さんも、和田さんのお勧めにホンノリ頬を染めるのも、若い連中の結構な話題になったりもした。

余談になるが、和田さんの命名の「四美麗会」という集いがあった時々和田さんのお声がかかりで、新橋鳥森の「笹ぶえ」の女将、神れい子さんの店に顔を揃えた。神さんに鳥本玲子、川守田礼子、森田裕子の三人を加えて四人の美人レイコさんにシビレル会という訳である。男性は和田さんに能味、三上(佑)、川守田の常連、時には室谷さん外のお顔も交じった。

実はこの小宴に必ずと言っていい程帆刈さんも呼ばれていたと記しておこう。

最後に帆刈さんの文章に触れたい。「道南会報」に載った随筆も数多いが、心から故里を愛したあの人らしい「いい文章」だった。素朴な心情に溢れ、読む人の胸中に響く優しさが偲はれる文章であったと思う。「創立三十五周年記念誌」に掲載の遺稿「青函連絡船の思い出」は何と他界される二ヶ月前のもの。執筆を願った私は、ご病状をさほど重く考えておらず、申し訳ないことをしたと痛恨にたえない。平成八年五月八日(享年七十一歳)前夜危篤の報を実弟古井勝春君から頂いた室谷会長と鳥本さんのお二人が我孫子の病院に駆け付けた時は、目を落とされた直後だったとお二人の無念の思いをうかがって、私も暗澹としたことであつた。

しかしそんな病状にも拘らず、明るく振る舞った帆刈さんの晩年は、彼女らしい立派な生き方だったと讀ませて上げたい。どうか霊界でも和田さんや従二(建二)さんご夫妻、宮本武雄さん方といつもの調子で仲良くやって下されば私は嬉しいと祈念合掌している。

写真、右より

帆刈、神、能味、森田、三上



「コンニャク条約」

く日米和親条約と箱館開港く

弦 巻 鋼 男

天保年間（一八三〇）頃より外国の捕鯨船が蝦夷地近海に出没し、その勢いは激しいもので、上陸しては水、食料、燃料を要求し、乗組員と住民や松前藩の勤番所との紛争が絶えなかった。

安政元年（一八五四）日米和親条約を結ぶ時、伊豆下田と松前箱館を選んだのは、捕鯨船への薪炭供給のため開港する必要に迫られたからである。

安政元年三月三日、老中松平伊賀守忠国より松前江戸藩邸に、浦賀来航中のアメリカのペリー極東艦隊が松前沿海に赴くことを願っており、もし来航した場合、軽率な待遇をしてはならぬという通達があった。この知らせは三駄馬の飛脚によって十日後の三月十四日に藩主松前崇廣の下に届けられた。

今回のアメリカ艦隊の来航は松前藩に取っては全く予期せぬ所であり、来航目的の具体的内容も分からず困惑するばかりであった。

ところで松前藩を代表する応接使について、四人の家老はいずれも高齢で、前年奥用人から家老格に昇格した弱冠二十七才の松前勘解由を、藩主崇廣の決断で首席応接使に選び、対応することになっ

た。副使に用人遠藤又左衛門、町奉行石塚官蔵、箱館奉行工藤茂五郎が任命された。

四月四日箱館住民に次の様な触書を出した。ーアメリカ船来航、浜辺や高い所からは見えてはならない、小舟を乗り出したり、みだりに徘徊してはならない、ア



箱館に入港したペリー艦隊

メリカ人はよく人家に立入り食物や酒を求め「或いは婦女子に目を掛け、小児を愛す」るので、婦女子は山手方面や遠方に避難させ、商店は休業せーこのため大騒ぎとなった。

四月十五日ペリー艦隊の帆船マセドニヤン、ヴァンダリヤ、サウサンプトンの三艘が入港、二十一日艦隊の他には汽船ポーハンタ号、ミシシッピー号が入港した。そして二十二日ペリー一行はボートで箱館に上陸し箱館の名主山田寿兵衛宅の裏座敷で松前勘解由以下の応接使と会見、通訳はペリー艦隊に同行した清国人の羅森が当たり、日本側に漢文筆記で交渉を進めたが、松前藩側は何を聞かれても幕府通達がないとの理由で、のりくらりと答弁した。

アメリカ側は松前藩に対して神奈川応接掛の林大学の添書を提出したが、幕府から松前藩に何の指示もなく、通訳さえ派遣されなかった。具体的な協議ができないため、怒ってペリーは松前藩主に直接交渉すべく松前に行くと言い出して脅し、応接使を苦しめた。

それを宥めたり、席につかせ話を続けるのは大変だったようだ。しかし松前勘解由の応待の温厚篤実さや、貴公子然とした態度はペリーに深い感銘を與えたという。またその交渉は「松前勘解由のコンニャク問答」と幕府にまで知れ渡り、諸大名に評判になったという。

箱館開港によって幕府は当然起り得る外交問題を処理するため、幕府直轄の箱館奉行を配置することを決定、箱館は翌二年三月より正式に開港された。安政三年以降、藩主松前伊豆頭崇廣は北国の小大名から国際派として幕府老中に昇任した。それを名家老として蔭から支えたのは松前勘解由であり、松前藩主は他国の外交官の間で開明的大名として有名になった。

道南会創立四十周年記念行事

- 一、記念祝賀会
一月二十日（土）午後一時より
プレスセンタービルホール
- 二、松前櫻鑑賞会 四月中旬
魚戸「香取神社境内」
- 三、ふるさと訪問旅行
八月一日（水）〜三日（金）
みなと祭参加と記念植樹
- 四、四十周年記念誌の発行
道南会行事回顧写真集
- 五、協賛広告の募集

上磯会総会・懇親会

十月十四日(土) 午後二時から内幸町飯野ビル十階レストラン「キャッスル」で、本年度の「東京上磯会」総会が開かれた。

参会者八十名の他、上磯町から松本助役ら三名も参加された。会は相馬会長の挨拶に続いて松本助役から上磯町の現況報告があり、乾杯のあと懇親会に移り一年ぶりの再会で話題が弾んだ。

◆◆観劇のご案内◆◆

「菜の花の沖」

司馬遼太郎が箱館ゆかりの高田屋嘉兵衛を描いた「菜の花の沖」が二月に「わらび座」の手で公演される。道南会員には一〇%引の優待券を提供するので観覧をお勧めしたい。

劇場 池袋東京芸術劇場中ホール

日時 二月八日(木)～十三日(火)

午後二時と七時

申込 「わらび座」関東事務所

TEL 〇三―三九二―三二一六二〇二

FAX 〇三―三九二―三二一六二〇三

住所氏名と「道南会員」と言って頂くと優待券を振替用紙同封

でお送りする。

料金 五五〇〇円を四九五〇円で提供する。

東京松前会総会・懇親会

十一月二十三日(木) 午後二時から内幸町プレスセンタービル十階のレストラン「アラスカ」で第四十八回「東京松前会」が開かれた。参会者約百名の他、松前町から町長、町議会会長なども駆け付けた。参会者の中には松前之廣氏をはじめ松前家、蛸崎家ゆかりの方もおられた。

弦巻会長の挨拶に続いて松村町長から松前の近況の報告があった。旧松前城の復元事業が認められ、十三年五月に桜祭と合わせて搦手門の完成の祝賀式を企画している。全部完成するには十年の歳月と約百億の費用が必要となる。町の景気は観光を含めて揮はない。最近鮭の水揚げが増えているが、いか漁が揮はない。町人口も二十九年合併時の二万四千から一万千と減ってしまった。明るい話題としては、松前中学のマーチングバンドが全道優勝し一月六日に武道館の全国大会に出場することとなり、町を挙げて応援するので、首都圏の関係者も是非応援してほしい。乾杯のあと松前から持参の水産物を堪能しながら歓談が続いた。

函館シルバー混声合唱団公演

顧問 弦巻 鋼 男

第六回ヴィサン(人生百歳) ジョイントコーラス・フェスティバルは、十一月五日「横浜みなとみらい大ホール」で、三十四団体が参加して日頃の練習の成果を披露した。この中に「函館シルバー混声合唱団」(団長 萬田真一氏) 百五十名が初出演し、フィナーレに四曲を合唱し聴衆に大きな感動を與え、拍手が鳴り止まなかった。

平均年齢七十数歳の函館シルバー合唱団は、揃いのピンクのドレスで大ホールのステージに映え、容姿声量で圧倒した。また以前より交流のある「合唱団ザ・シワクチャーズ横浜」との三百名の特別合同合唱では「歌があるから」など二曲を大合唱し感動を呼んだ。

翌六日に代表が井上函館市長のメッセージを持って横浜高秀秀信市長(夕張出身)を表敬訪問して感謝された。

この度のシルバー合唱団横浜公演は函館からの文化親善大使であり、観光大使としての役割を十分に果たされたことに、心から敬意を表した次第である。



函館弁(その四)

川守田 孝 平

「す行」 すが(しが) すがもり すつけ ずっぱり すてれんこ ずなる すまっこ するべ するべし するべや	つらら 氷 雨漏り 酸っぱい 一ぱい 沢山 片足跳び けんけん どなる 叫ぶ 隅 やろう しよう 右 同 右 同	「た行」 たいぎ たいしたうまかった たいどとる たぐあげる たからもの たな たなぐ 抱える 持つ	億劫 大変美味しかった よい所をみせようと きどる 高く上げる 実際の役に立たない 者(お荷物) 赤ん坊を背負う紐	「つ行」 つらつけね(つらつけない) 厚かましい	「ち行」 ちやつこい ちやつちやどこい(さつきどこい) ちゃんちやらかかしい ちよす ちよつこら ちよつこり ちよべつと ちよろつと ちらがす ちらげでるども	小さい 早くこい 片腹痛い 笑止千万 さわる いじる ちよつと ちらつと ちよつと 少し 右 同 ちらりと 散らかす 散らかつているけれど	「て行」 とうきみ(とうきび) どこにどこに とっかり どつてんかえした どつてんこぐ どますく どんぐい どんげ どんざ	とうもろこし どうしてどうして とんでもない *打消しのことば あざらし びっくりりした びっくりりする まごつく 虎杖(いたどり) 右 同 刺子半纏	「う行」 うわべだけ一通り	ですと てつくい てつくりかえす ではる ではれ ではつて でめんとり てらつぱげ でれつき てんこもり てんぼ	そうです そうだ ひらめ ひつくりかえす 前に出る 出かける 前に出る 出てこい 出かけている 日雇い労働者 つるつる頭 ストーブの火掻棒 山盛り 手仕事の出来ない者 不器用者 指を失った者
--	---	--	--	--------------------------------	---	--	--	---	------------------	--	---

同窓会だより

◆東京幸小学校同窓会

九月三十日(土)

芝弥生会館 参加者 四十四名

◆東京弥生会

十月二十日(金)

日本橋三越 参加者 三十名

◆白楊ヶ丘同窓会東京支部総会

十月二十七日(金)

日比谷 星稜会館

参加者 百五十名

◆東京青柳会

十一月十七日(金)

表参道 ダイヤモンドホール

参加者 五十名

◆函館遺愛同窓会

十二月一日(金) 二百十名

アイビーホール青学会館

◆函館工業高東京支部同窓会

十二月三日(日)

芝弥生会館

二上達也さんに市栄誉賞

函館市は十二月一日、函館出身で日本将棋連盟会長の二上達也氏に「函館市栄誉賞」を贈ることを発表した。氏の将棋普及発展への貢献「はこだて親光大使」としての寄与などを高く評価したものである。二上氏は道南会顧問もされている。

十二年度後半行事報告

☆「サツポロビール工場見学会」

八月五日(土)午後三時からサツポロビール千葉工場の見学会に五十名の会員が参加。最新設備のビール製造工程を見学後、出来たての生ビールに舌鼓を打って帰途についた。

☆「夏期懇親会」

八月二十六日(土)午後一時よりお茶の水「ホテル聚楽」で開催、参加者百名。室谷会長の挨拶、来賓の祝辞のあと中村副会長の発声で乾杯から懇親会に移り、十名の新入会員の紹介があり盛り上がった。福引きのあと午後三時過に閉会。

懇親会新入会員紹介(写真下)

向島百花園(写真左下)

江戸深川資料館(写真最下段)

道南会創立四十周年祝賀会

一、一月二十日(土)午後一時開会

(受付開始〇時三〇分)

二、場所 プレスセンターホール

(内幸町・地図別添)

三、会費 祝賀会費 八〇〇〇円

年会費 四〇〇〇円

合計 一二〇〇〇円

◎二月十五日迄に同封の返信葉書にて記入の上、投函してください。

☆「百花園探訪」

九月二十七日(水)十一時半から向島の百花園を訪ねた。週日のため参加者は十六名と少なかったが、秋の陽射しは美しく、折から萩が満開で都会の中の秋を満喫した。帰途は隅田川畔を歩いて名物の「長命寺の桜餅」に寄って浅草に出たが、川岸に立ち並ぶ異様なホームレスのビニールハウスに一驚した。

☆「深川江戸資料館と清澄庭園散策」

十月二十一日(土)十一時に集合、参加者二十名で深川を散策。江戸資料館は中々洒落た施設で、江戸下町の風情を丁寧に再現していて飽きさせない。

続いて紀ノ国屋文左衛門の屋敷跡を、明治に岩崎家が「回遊式林泉庭園」に作



庭し、戦後、都に移管された「清澄庭園」を訪ねた。大きな池を巡って、樹木や石で数奇を凝らして作られた庭園を鑑賞しながら、秋晴れの中で弁当を使って散会。有志は歩いて深川八幡を参詣した。

☆「神代植物公園の秋」

十一月十八日(土)十一時半、十六名が集合。小春日和の神代植物公園は、一昨年、寒さに震えながら観梅をした同じ場所とは思えぬ佇まいで、菊花展示場や満開のバラ園を訪ねながら、紅葉、黄葉を鑑賞した。中央広場で歓談しながら弁当を使い、帰途に深大寺を参詣して解散。有志は深大寺そばを味わって帰った。



☆「歳末築地市場視察」

十二月二十二日(金)午前九時、築地の本願寺前に二十五名の会員が集まり、道南会の恒例となった歳末の築地市場の視察と、お正月用品の買出を行なった。今年は混雑も一入であったが、参加会員は慣れた足取りでお目当ての店で市価より安い品を買求め、解散後に名物の場外の寿司屋に立寄るグループもあった。



会報「道南」十三年新年号

発行 平成十二年十二月二十五日

発行所 北海道道南会事務局

中央区日本橋三十一六

印刷所 (株)ソーラン社

中央区日本橋小伝馬町十六一八

(株)邦友内